

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2016.12) 平成28年度:39-40.

看護学生のがん患者に対するイメージ変容について

庄司 実生, 山内 菜緒

看護学生のがん患者に対するイメージ変容について

庄司実生 山内菜緒
(指導：石川洋子)

緒言

日本での悪性新生物による死因は第1位であり、死亡数は約 37 万人と年々増加している¹⁾。一般的に 74.4%の人ががんに対し否定的イメージを持っている²⁾。否定的イメージは行動を規制し、学生の学習意欲やケアの質に影響する³⁾。そのため、看護学生のがんイメージが肯定的に修正されることが望ましい。学生の肯定的がんイメージ変容の過程は、がん患者との関わりで辛く悲しい気持ちの中に深い学びを得ることであると述べられている⁵⁾。本研究ではがん患者との関わり経験や学生カンファレンスから肯定的イメージに移行する要因について明らかにする。

方法

1. 対象

平成 28 年度に在籍しているがん看護学を受講済みの A 大学医学部看護学科 3～4 年生を対象とする。がん看護学とは、A 大学医学部看護学科第 3 学年前期に開講する必修科目である。

2. 調査方法

平成 28 年 8 月 19 日～8 月 29 日に、無記名自記式調査票を用いたアンケート調査を行った。

3. 調査内容

がんについての知識問題を 5 問出題し、がん患者との関わりの有無・内容、関わり前後のがんイメージ変化の有無とその要因について回答を得た。イメージ測定は犬童⁴⁾が作成したがんイメージスケールを参考に、「生命—死」を追加し 15 項目の形容詞対を設定した。回答項目の 1 を肯定的イメージとし 0 点、2 を否定的イメージとし 1 点で点数化した。

4. 分析方法

単純集計後、がん患者との関わり・イメージ変容の有無について 4 つの群に分けて分析した。

5. 倫理的配慮

本研究の趣旨、匿名性の確保、研究参加の任意性、不参加や同意撤回による不利益はないこと、調査票は適切に破棄することを口頭と書面で説明した。

結果

106 名に配布し 3 年生 52 名(回収率 95%)、4 年生 38 名(回収率 75%)計 90 名(回収率 85%)の回収が得られ、全て有効回答とした。

1. がんについての知識問題

90 名中 83 名が全問正解であり、残り 7 名が 1 問不正解(4 点)であった。点数平均は 3 年生 4.90、4 年生 4.95、全体で 4.92 ± 0.267 であった。

2. がん患者との関わり

3 年生 33 名(63.5%)、4 年生 34 名(89.5%)、計 67 名(74.4%)が関わりありと回答した。がん患者 3 人以上の関わりは 3 年生 6 名、4 年生 16 名であった。

3. がんに関する学生カンファレンス参加経験

3 年生 52%、4 年生 82%が参加経験があり、全員ががん患者の理解が深まったと回答した。

4. がんのイメージ変容

がん患者と関わる前、がん看護学受講前、学生カンファレンス参加前のがんイメージはドラマ、映画、小説の順に影響を受けていた。がんイメージスケールは学生の約 2 割が「穏やか—激しい」、約 3 割が「自然—不自然」に肯定的イメージを持っていた。その他の項目は約 9 割が否定的イメージであった(図1)。

1) 肯定的イメージへの変容

がん患者との関わり後、がん看護学受講後、学生カンファレンス参加後のがんイメージは、3 年生 81%、4 年生 74%、全体で 78%がイメージ変化ありと回答した。肯定的イメージに最も多く移行したがんイメージスケールは「生命—死」であり、次いで「希望—絶望」、「穏やか—激しい」、「自然—不自然」であった。

2) 否定的イメージの残存

一方、「にぎやか—寂しい」「楽観—悲観」「恵み—残酷」の順に否定的イメージが残存していた。

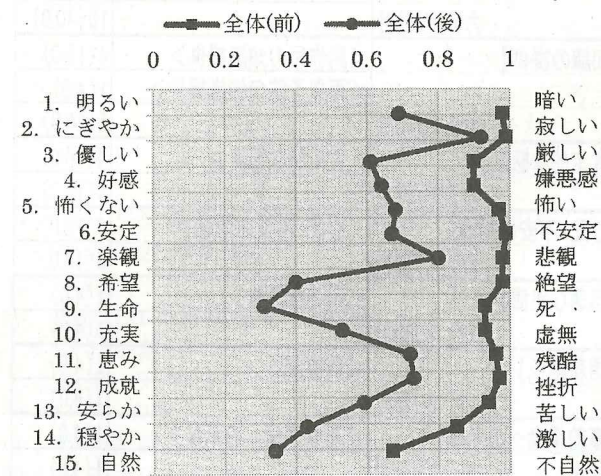


図1 看護学生のがんイメージスケールの変化

3) がんイメージスケールの変容

関わりがあり肯定的イメージに変容した群、関わりがなく肯定的イメージに変容した群、関わりがあり否定的イメージのままの群、関わりがなく否定的イメージのままの群の 4 つに分けられた。

【関わりがあり肯定的イメージに変容した群】

3 年生 51.9%、4 年生 68.4%、全体で 58.9%であった。がんイメージスケールの変化は点数平均で 1 人関わり—5.55、2 人関わり—4.7、3 人関わり—9、4 人関わり—7.09、5 人関わり—8.5 であった。複数の患者と関わりがある学生は肯定的イメージ移行の要因として「人によって受け止め方が違う」「QOL に特に重要性を感じた」との回答が得られた。

病期による肯定的イメージ移行への要因について

表 1 に示す。このうち、ステージIV期・終末期患者と関わりがある学生は「家族や周囲の人への感謝、命の大切さに改めて気が付いている様子」から「恵み—残酷」が肯定的に移行していた。

表 1 病期による肯定的イメージ移行への要因

0～Ⅲ期のがん患者	Ⅳ期・終末期のがん患者
<ul style="list-style-type: none"> ・早期発見、早期治療により治ることがある ・治療に前向きな姿勢 ・完治する希望、完治後の目標、これからの生き方を考えている様子 ・楽しそうに生活している様子 ・弱音を吐かず強い意志をもち闘病する様子 ・患者に対して医療者や家族の関わり、患者の思いを汲み取り患者のためにできることをしている様子 	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の「生きたい」という強い思い ・がんを患ったことで得られるものもある ・必死に治療に取り組み生きている様子 ・希望を捨てずに闘病している様子 ・残りの人生を全うしている様子 ・「生きてこられて良かった」という発言 ・家族や周囲の人への感謝、命の大切さに改めて気が付いている様子

【関わりがなく肯定的イメージに変容した群】

3年生 30.8%、4年生 7.9%、全体で 21.1%であった。肯定的イメージ移行の要因として「がんは様々な治療法があり、必ずしも死ぬわけではない」「完治する可能性がある」との回答が得られた。

【関わりがあり否定的イメージのままの群】

3年生 11.5%、4年生 21.1%、全体で 15.6%であり、「副作用で苦しい思いをしていた」「再発した」「予測していたものと差異がなかった」、「関わりが難しかった」との回答が得られた。がんイメージスケールは幾つか肯定的に移行したが、がんイメージの変化はないという回答も得られた。

【関わりがなく否定的イメージのままの群】

3年生 5.8%、4年生 2.6%、全体で 4.4%であった。「治療方法、内容は厳しい副作用などで苦しい状態である」「いつ転移して「死」に至るかわからないため」との回答が得られた。

考察

1. がんに関する知識とがんイメージとの関連

学年間で知識を得た時期が異なるが、回答率が大きく差異はなかった。そのため、知識と肯定的イメージの関連性について、結果は得られなかった。しかし、講義によりがんに関する知識を得ることが肯定的イメージ変容に影響を及ぼすと考える。

2. がん患者との関わりが及ぼす影響

がん患者と関わる前、がん看護学受講前、学生カンファレンス参加前は、世論調査²⁾と同様に A 大学の看護学生もがんに対して否定的イメージを持っていたが、臨床実習においてがん患者を受け持つことはがんイメージの変容に大いに影響している。

【関わりがあり肯定的イメージに変容した群】

表 1 から、実際に患者の闘病姿勢を目にし「生命—死」「希望—絶望」が肯定的に移行したと考える。ステージIV期・終末期患者では、がんの罹患により得られるものがあると考えが変容し、「充実—虚無」「恵み—残酷」が肯定的に移行したと考える。

一方、がん治療について否定的イメージが残存しており、関わり前後でイメージの差異がなかった、またはより否定的イメージが強くなったと考える。懸命に闘病する患者に対し、がんが蝕んでいく様子を感じ「にぎやか—寂しい」「楽観—悲観」の否定的イメージが残存したと考える。阿部ら⁵⁾も述べている通り、辛く悲しい気持ちを抱きながらもそれらに勝る学びを得たことが肯定的イメージに移行した一要因であると考えられる。また、多くのがん患者との関わりでがんイメージスケールが肯定的に移行するとは一概には言えない。しかし、複数のがん患者と関わった学生は、患者との関わりからがんの肯定的、否定的部分を踏まえて現在のがんイメージ変容が成されたと考える。

【関わりがなく肯定的イメージに変容した群】

研究者はがん患者との関わりから肯定的イメージに移行し易いと考えていたが、この群は関わりが少ない3年生に多く、講義やカンファレンス参加経験が影響したと考える。学生カンファレンス参加経験がある学生は患者の希望の部分や心理状態を知り、がん患者の存在がより現実的になったと考える。このことから、実習やカンファレンス経験を積むことは患者やその先の看護の理解を深めることにつながると考える。

【関わりがあり否定的イメージのままの群】

辛い闘病生活や看護介入に困難を感じ、否定的イメージが残存したと考える。また、看護学生は感受性が強く、臨床現場と理想との差異があったと考える。イメージスケールの肯定的変化があるが、がんイメージ変化がない学生は、否定的イメージが強く残存し、がん自体のイメージが変容しにくかったと考える。

結論

看護学生のがんイメージの肯定的変容には、患者との関わりや講義、学生カンファレンスが強く影響している。知識問題は正答率が高く、がんに関する知識と肯定的イメージの直接的な関連は認めなかったが、がん看護学受講後に肯定的イメージに変容していることより、がんについての知識は肯定的イメージに関与している。また、実際の患者との関わりは知識の統合や学習意欲向上に強く影響を与えると考えられる。

参考・引用文献

- 1) 厚生労働省:平成 27 年(2015)人口動態統計の年間推計結果の概要
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai15/dl/2015gaiyou.pdf> (2016 年 11 月 14 日 16 時 17 分 閲覧)
- 2) 内閣府:平成 26 年度がん対策に対する世論調査 1. がんに関する印象・認識について
<http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-gantaisaku/2-1.htm> (2016 年 11 月 1 日 16 時 25 分 閲覧)
- 3) 杉谷かずみ他:看護学生のがんイメージと教師の役割,大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要,第 9 号,2003.
- 4) 犬童幹子:看護者のメンタルヘルスに関する研究—がん看護に伴う看護者の不安に関する因果モデルの検証と再構築—,日本看護科学学会誌,22(1):1-12,2002.
- 5) 阿部育子:成人看護実習後における看護学生のがん,乳がんのイメージの変化,順天堂医療短期大学紀要 14 巻,2003.